

1 日目のまとめ

松本 光朗（独立行政法人 森林総合研究所 REDD 研究開発センター長）

今日は、最初に平石さんから、IPCC の取組を例に出しながら科学者の役割を示していただいた。私も、IPCC のメッセージがしばしば誤って伝わっていることを非常に危惧している。科学者の努力と同時に、それをうまく伝える方法を今後考えていかなければいけない。

午前中は、外務省、環境省、経産省、林野庁と、REDD プラスにかかわる関係省庁の方がここまで一堂に集まることはなかなかないのだが、それぞれの立場で REDD プラスの重要性、それに対する取組、認識を表示していただいた。外務省は、日本が取るべき戦略の中で、一つ REDD プラスの対策を位置付けている。環境省には、全球的な目標の設定の必要性をお示しいただいた。経産省からは、二国間クレジット制度、その中で REDD プラスはやはり大きな役割があるということだった。林野庁からは、全体として REDD プラスを位置付けて、さまざまな取組の中で REDD プラスがエンジンになる可能性に関係したお話をいただいた。

午後には、JICA からは完全に REDD へのシフト宣言をいただいて、腹を決めたという感じがした。私は先日のシンポジウムにも参加したが、JICA との連携の必要性、森林総研としてのかかわり方の重要性をあらためて感じた。

そして民間からの取組として、海外林業コンサルタント協会の千葉さんからベトナムの事例、アジア航測の佐野さんからはラオスの事例、日林協の鈴木さんからはカンボジアの事例、丸紅の加藤さんからはインドネシアの FS、CI の浦口さんからは保全契約という観点からの事例をいただき、広島大学の山田さんからは実際の RIL による試算をいただいた。それぞれの立場で非常に努力されていて、それを共有する機会が今まではなかなかなかったが、このような形でインプットしていただくことができた。

「やってみなければ分からない」というお話がアジア航測の佐野さんからあったが、まづやってみるということで、そこから得られた本当に大切な経験を共有しながら、新しいものを作っていく。そして、それをまとめ上げて、ともすればばらばらに見えてしまうものを日本の取組として打って出ていく姿勢が大切かと思う。

さらに総合討論では、研究者へのさまざまな要望があった。例えばクレジットマーケットの早い立ち上げが必要だという投資者からの視点は、研究者にはなかなか持てない。そういう点からも、非常に多角的な意見や要望をいただいたと思う。そして、実施に当たっては精度とコストの関係性をいつもどう位置付けるか。また、研究者は得てしてコストを

度外視したり、「コスト評価は自分の仕事ではない」という態度を取りがちだが、技術開発はいつもコストと背中合わせだということを意識して取り組まなければいけない。

また、私が最初にご披露した技術解説書の「REDD クックブック」について、アジア航測の佐野さんに非常に興味を持っていただいた。このプロセスについては、もちろん今日発表していただいた方々の経験をそこにぜひ取り入れたいので、インタビューして、それに反映したいと考えている。

明日は、特に焦点となっている MRV やセーフガード、制度設計について深い議論が期待される。ぜひ明日も議論に参加していただき、我々のコミュニティのアウトプットに持っていきたいと考えている。